

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【タイトル】

魔法少女リリカルなのは Second Life

## 【作者名】

雪都 叶夢

## 【あらすじ】

目が覚めたら暗い暗い空間にいた。壁の見えない、どこまでも続いているような不思議な場所。そこには光がないにもかかわらず、自分の身体ははつきり見える。しばらくするとそんな変化のない暗い場所の一つの変化が起きた。突如現れた白い点。それは人間となって笑いかけた。

お亡くなりになりました、おめでとつございます、と。

## オープニング

世界は一つ。並行世界は無く、今現在のこの世界だけが実在している。故に、異世界は幻想ファンタジーとされ、それを題材にした物語は夢物語ストーリーである。しかし、それは人に多大な夢を与え、同時に、夢を諦めさせた。夢は夢でしかない、と。

だが、それは何故だ？

誰も並行世界に行ったことは無い。故に其存在はたとえ有ったとしても、無いものとされている。知識がない故に是を否としている。そうは考えられないだろうか？

だが、もし仮にそうであったとしても、誰がその是非を説けるのだろうか。

それが説けるならば、あるいは、異世界に渡った者だけなのだろう。

一つ、仮定をしよう。

もし、異世界から来た、と言つ人がいたら、君はそれを真実だと受け止めることができるだろうか？

それは不可能だろう。

虚実も多者が唱えれば真実となる。

つまりはそういうことなのだろう。

たとえ、異世界から来たと言えども、それが一人ならば、それは真実とはならない。むしろ法螺吹きと罵られさえするだろう。

人間とは莫迦な生き物だ。真実を真実と思つことができないのだから。そうやって真実を闇に葬り去ってゆくのだろうか。

さて、仮定の話はこのへんにして現状を確認してみよう。

「いざねばんじいじいだよ。」

ついそう言わざるを得ない状況に立っている。

何も無い真つ暗な空間。

それなのに自分の身体ははっきりと見え。

どこを見てもそれ以外は何もない。

初めは誘拐でもされたのかと思った。しかし、考えていく内にそれは無いと至った。おかしな点が多すぎる。

親が特別金持ちでもなければ、誰かに恨まれもしていないはず。

見張りはおらず、拘束もされていない。こんな動き回れる状態で置いておかないだろう。

さらにこの部屋。ざつと歩いてみた。しかし、十分ほど歩いても壁はやってこない。

そしてなにより、こんな明りのない場所で、なぜ、自分の身体がはっきり見えるのだ。普通真つ暗な光のないところでは体なんて、ある、と言うことしか分からないだろう。うっすら見えることはあっても、はっきり見えるなんてことはあり得ない。

故に考える。ここはなんだ、と。

けれど、その問いの答えは出ない。いつそ夢でも見ている、これは明晰夢だ、と言うことにしてしまえばいいのだろうが。それも無いだろう。夢の様にぼんやりしているわけでも無い。明晰夢ならば、夢の内容を変えられるとも聞くが、そんなことは決しておこらない。

ふと、上を見上げる。さつき確認した通り、ずっと上まで、あるいはすぐそこまで、闇でおおわれている。そこに例外は無く、どこも平等な黒。いや、違った。もはや遠くなのかそこなのか分からない遠近感のなか、ポツンと白い点が見えた。上から迫るように落ちてくるそれは、徐々に目で何なのか確認できる大きさになって、ようやく気が付いた。それは“人”だと。

「あ、白だ」

つい目が行ってしまったのはその人が履いていたスカートの中。

事故だ事故だと思いつつもつい目が行ってしまつのは思春期の男性さがというものだろう。

それに気付いたのか、その純白パンツの少女は、きゃあ、と可愛い悲鳴を上げて落下してきた。その真下にいたのが災いとなって、下敷きになってしまつ。

「あう……見たなぐです」

その落下を何もなかった、と言う風に処理した少女は目の前に立つてこちらをギロリと睨みつける。とは言っても幼さの残る顔立ちの少女のためそれは怖さなどは一切なく、寧ろ小動物的可愛さだけが残っていた。

少女を年齢は自分と同じ高校生ぐらいだろうか、と観察していると、ある部分が目に入る。

それは人間の物とは到底考えることのできない。

まるでファンタジーの世界の様な、現実にあるわけのない。

肩甲骨あたりから生えているのだらう。

まるで天使のような純白の。

“翼”だった。

その奇異の視線に気づいたであろう少女は、ニコツと笑顔を浮かべて、こう言った。

「おたくなりになりました、おめでとーいじやいませ」

「……………はっ」

その言葉は誰に対して言っても失礼な、と言うか、誰も言う筈のない台詞。死んだことがおめでたい。そんな話はばかげてる。いや、そもそも、死んだ、と言うことに関して、意味が分からない。

そう言えば、ここに来る前に何をしていたのかを全く考えていなかった。

ええと確か、と思いついてみる。

「あれ？ マジで死んだの？」

そこにあつた記憶は急に心臓と頭が苦しく、痛くなった記憶だった。その後の記憶は無く、そのまま死んでしまったと言うことが考えられる。だが、その意識を戻したのがここであったと言つことも考えられる。

「それは無いですよ」

突如思考に割って入ってきた少女にギョッとしながら、その何でも知つていそうなほど深い真紅の瞳を見つめ返す。

「……どうして、ここだ？」

声が震えていた。訳のわからない状況、訳の分からない空間、訳の分からない少女。それを前に動揺しているのか。それとも、この自分と大差ない少女におそれに近い感情が沸き起こっているのか、それは既に判断の付かないくらい混乱していた。

「ここは死後の世界。そして私は転生を司る神、トラングレイシアです。気軽にトランとでも呼んでください。死者、マカケレイ真掛マカケレイさん」

先ほどの様な年相応の少女の面影はそこにはなく、凜と澄ました顔立ちで少女、トランは言った。だが、それでも繕っている感はぬぐいきれず、どうしても違和感だけが残ってしまう。たとえ容姿、顔を凜としていてもそれが演技ならばどうしても雰囲気になんか出でてしまう。だから、なのだろう、つい糺は言ってしまう。

「あ、演技はしなくていいです。と言つか冗談は良いんでここどこですか？」

「むー！　せつかく神様っぽくしたのに！！　て言うかここはホントに死後の世界で、私は神様だよ！！」

あっさり素に戻したトランは激高するように怒鳴る。それでもやはり先ほど同様。

言葉では疑っていても糺は既にこの少女が神様と言うのはあなたが間違ってもないと考えていた。背の翼、思考を読んだこと、これまでトランが見せたことは信じざるを得ないから。

「じゃ、信じてくれたみたいだね！」

にや、ってなんだよ、とは思うがツッコまない。また話がずれていくと直感が言っている。だから糺は話をあえてスルーし次に持っていく。

「で、神様がどうしたんだ。天国は無いのか？」

「え？　天国なんてないよ。まあ、知らないのも無理はないか」

そう言ってトコトコ歩き、数歩いったところで手を大きく開いた。さながら大の字の様に。

「説明しよう！！　人間は死んだ後は誰一人、例外もなく、老若男女、誰もが平等に、転生をするのだっ！！　転生後の世界、は自由に決められ、誰とも力づることは無い。一人一人を人間の数だけ存在する並行世界に放り込むのです」

聞いたことがあるだろう。人生はまるで自分が主人公の物語のようだ、と。自分以外はみな役者。死ぬと言うことは舞台そでに下がる  
と云うこと。  
ストーリー

その突拍子のない説が今神の手によって肯定されたのだ。

「そう、君の今までの人生は、他の誰とも知れない主人公の物語の役者だったと言うわけです。一度役者を終えた人は転生を許可され、違う人生を、主人公としての人生を送る。ただ、先の見えない物語だから、結末がハッピーエンドかバッドエンドかはその人の努力次第」

つまり、今までの人生同様、幸せになれるか不幸になれるかはその人次第。いつの世、どこの世界でもそれは変わらないようだ。

いや、違うのか。役者と言うことは台本があり、その人の人生は決まっていた、と言うのだろうか。その例外が転生者、主人公。紬の死は生まれたときに既に決まっていた、運命論という奴だったか。

なら、と紬は言う。

「そんな周りが役者の世界には行きたくない。僕は運命を呪っていたんだ。運命に支配されていると分かったらもうそんな世界に意味も、価値もない」

大きな目をさらに広げ、口もだらしく開いて、トランの顔は驚愕で満たされていた。トランにとってそれはあり得ない、今までに例を見ない反応だったのだ。誰しもが両手を上げて喜び、それなら、と生前出来なかったことをしようと言いつつ喜びに満ち溢れている。故に死んだことがおめでたい。そう言ったのだ。

それなのに、この男はそんなものに価値は無い、そう言い切ったのだ。驚くと言う方が不可能だろう。

そしてそれは驚きを次第に越えていき、ついには。

「ふ、ふえええええん」

赤い瞳から大粒の涙が零れ落ちた。

「お、おい、なぜ泣くんのだ？」

「ふえ、だって、だって、神様の最初の仕事失敗……ふえええええん」

要するに神様になって初めての仕事、つまり糺の転生を失敗したと思っ  
て泣き出した、と言っわけらしい。若干呆れつつも、この絵はか  
なり不味いだろう。見る人がいないと言っても、男が女を泣かせて  
いる絵なんてみたくは無い。

どうやってなだめようか。

そんなことをこんな状況でも冷静に考えているところで、今度は違  
う声が響いてきた。

「ふおっふおっふお、トランちゃん、なんで泣いているのかね？」

次の瞬間目の前に神様の代名詞ともいえる白く長い髭を生やした  
白い服の老人がいた。おじいさんと言っにはいささか若い気もする  
が、実際の歳よりも老けて見えるのはその綺麗に染まっている白髪  
の性なのだろう。

「ふえ、おじいちゃん、ごめんなさい……この人が……転生してくれな  
い……」

「って、僕の性なのか!？」

そんなトレンの言葉を聞いたその神様は、糺を睨みつける。

「貴様……なに可愛いトレンちゃん泣かしたんじゃ、死なすぞ……？」

その言葉に蛇に睨みつけられた蛙の様にそれだけで動くことは出  
来なくなってしまう。これは本当に殺されるかもしれないと、覚悟し  
ていた時に意外なところから助け船がやってきた。

「やめてよお、おじいちゃん。悪いのは私なんだよう。説得できな  
かったんだから怒るんだったら私にして」



血のつながりは無いだろうと思われる、蒼と翠のオッドアイの神様はそれだけであるおろとしましてしまう。

「この人が、異世界に転生したくないと言っんです。役者しかいない世界なんか価値がないって……」

そうトランが簡潔に説明すると、その神様の目つきがまた変わる。それは物を見定めるような、何でも見透かされるような少々不快に感じられる目線。見られているのはもちろん糺。背筋が凍ることを感じながら。

「ふむ、糺と言ったな。なら、いつそ物語の決まっている世界に転生するか？ 道筋はあるが運命に縛られていない無法地帯じゃ、が、だからこそ運命を変えられる。運命が嫌いならそれを変えればいい。そうは思わんかの？」

確かに、と思ってしまう。それが真実なら運命なんてものは無く、無理だと思えてもどこかに無理ではない道が存在する可能性のある世界。それなら、と思ってしまう。

だがそれがいけなかったのだろう。忘れてはいなかった。だが、考えないなどは不可能だろう。心の奥底を見るのだから隠すなんてことは出来ないのだ。

「この心を読む神様に。」

「よし、決まった様じゃの。後は任せたぞ、トラン」

「は、はい！ 助けていただきありがとうございます」

「ふおっふおっふお、気にするでない」

と、そんなやり取りの後、神様またしても突然消えていった。

「さて、「」からが本題です。まさか説得で「」まで時間がかかると

は思ってませんでした。なのでここからは時間巻き巻きで行きたい  
と思います」

「ちょ、まだ誰もいいとは言って……」

「ふえ、ダメなんですか……？」

また泣きそうになるトランに、うっ、とどもってしまつが、仕方  
ないことだと糺は思う。泣かれるとあの神様がまたやってくる、と言  
うこともあるだろうが、その前にこんな可愛い少女に目の前で泣かれ  
ると言うシチュエーションに慣れて(慣れてしまつのもどうかと思  
う)はいないのだ。

「あ、あ、ったく、もういい、好きにしゃがれ！」

漫画ならパァッという効果音が付きそうなほどの笑顔にしたト  
ランは、気を入れ直したように涙を拭いて続きを話す。

「では、まず世界ですが、こちらの管轄の世界だと既に1択省きます。  
転生につきまして、特典と言つものが渡される決まりとなっております。  
ただしこれは生前の生き方でどれほどの物かを決められます。  
具体的に良いますと、生き方、寿命、死因、善行、悪行、それらをひっ  
くるめて、それらに合った能力が渡されます。こちらで転生されるま  
でわかりませんが、大丈夫でしょう」

一気に言われた感が物凄いが、量的にはさほどでもない。行く世界  
は任せるとして、特典、と言つものは生前の行いで善し悪しが決まる  
と言つことだった。

「あ、あと「レ渡しておきますね」

そう言つて渡されるのは剣のような形をしたキーホルダー。これ  
はなんだと思いつつも受け取る。

「これは向こうの世界での必須アイテムと言っても過言ではないので持っていてください。では、これで説明を終わりますよ。分かりましたか？」

「ああ、たぶん」

「なら良しです。生前酷かった分、その世界では楽しく過ごしてくださいね。最強、なんて目指すのも面白いかもしれませんよ。では行ってらっしゃい」

「な！ トランはなんで僕のことを……」

そこまで知っているんだ、と言い終わる前に糺の意識はどこかへ飛んだ。

## 出会いの未来視

次に糺が目を覚ましたのは森の中だった。

すでに日は高く上っており、そろそろ昼と言ったところだろう。季節までは分からないが、そこまで暑くもなく寒くもない。少々肌寒いくらいだ。春か秋だと思われる。否、木々が色とりどりに染まっただけ、若葉色のため春と考えると良いだろう。

それにしても、と糺は思う。

「なぜ森？ いや、街中で倒れててもダメだろうから良いんだが、別にこんなところかも分からないところに落とさなくても……」

そう愚痴ったところで事態は全く変わらない。いつまでもこうしているわけにもいかないと考えその腰を上げた。

そこで違和感に気付く。目線が低い。どう考えても170あった身長から見える景色じゃない、と。

そして自分の身体を見てその訳を理解した。

「…………体が縮んでるのか」

何とも信じがたい話だが、自分の身に起こっていることだ。信じざるを得ないだろう。この体は大きさからみて10歳前後のようだ。どうしてこうなったのかは分かり切っている。トレンのせいだ。とは言え、こちらから連絡は出来ないで元に戻してもらうことも、訳を問いただすことも不可能だ。この体で乗り切るしかないだろう。

だが、まずここから出ないことには何も始まらない。どこまで体力が落ちているのか不安になるが、その足で歩きはじめる。

『マイロード、そちらではありません。逆です』

突如、機械音の様な男性の声があたりに響く。それも糺のポケットの中から。ギョツとしながらも、その声の主を探るべくポケットに手をつっ込んだ。そこにあったのは意識が遠のく前にトレンから受け取った一つのキーホルダーただ一つだった。有り得ない。そう思いつつも聞かすにはいられなかった。

「ちっきの声は君？」

『御明察です、マイロード』

そうその音声はそのキーホルダーから鳴っていた。

その事実よりも糺はもつすでにいるんなことがありすぎてこんなことでは驚かなくなっている自分に感心した。

それに加え、これからどんなことがあるのだろうと、少し興奮さえしている自分がいる。生前では浮かぶはずのない思い。格子の中からは想像もできない出来事。既に糺は満足していた。

『マイロード、町はあちらでございませす。ちなみにトラン様より伝言をお預かりしておりますが、聞きますか？』

「ん、じゃあお願いしよっし」

『えーっほん。』

糺さん転生は無事にできましたか？ まず気になっていることでしょうか。しょうこの世界なのかを発表します！ なんとそこは「魔法少女リリカルなのは」の世界です!! どうですか？ うれしいでしょっし」

「いや、そんな世界知らんし」

『えっと特典ですが、なんかものすごく多かったです。よかったですね？』

「なぜ疑問形!? 変なのあんの!?!」

『えっと能力名読み上げますよ』

1：蛇なる者

2：影咲く手

3：縁の恩恵

4：蛙空を知る

5：無を貫く意

6：百戦練磨

7：見通す眼

です。あ、内容はさっぱりなので自分で探してね。以上。家、用意できなかったけど頑張っ！」

「いや、内容分らないって…… てかホームレスかよ」

この際、能力はどうでもいいからまず住む家確保しないと、考えるもののこの子供の姿ではバイトしようにもどこも採用されないだろう。最悪野宿だな、と一旦考えを終わらせる。

『マスター、後反対側のポケットにトレン様が何か入れてましたよ』

その声に従って左のポケットに手を伸ばすと何やら手帳の様なものが入っていた。今度は手紙か、とも思い広げてみる。よくこんなものが入ったなと若干感心しつつもその内容を読む。

「って、貯金通帳じゃねーか！ てかこの金額なんだよ!？」

通帳の事にも驚いたがそれよりもこのゼロの数に驚いた。ゼロ8つ。1億円。しばらくは何もしなくても暮らしていけるレベルだった。一生で普通の人間が稼ぐ金が3億だったはずだからこれはその3分の1。30年分と言うことだろうか。だが、それよりも問題なのが、

「金はあってもこの姿じゃあ家売ってもらえないだろ……」

全ての道はローマに通ず、とでも言うつもりでどうしてもこの体の問題に行きつくようだ。はあ、とつきたくもないため息が漏れてしまふ。死んだときの姿で来れば18歳だったためこんな苦労は

せずに済んだだろうとありもしないことを考えてしまうのは仕方がないだろう。

『ちあ、マイロード行きましょっ』

そういつこの機械(?)は空気を読めないのか、はたまたマイペー  
スなのか、そんな提案をしてくる。正直その場でいつまでも悶々とし  
ていられる、と言うよりしてしまっが、それでもこのキーホルダーの  
言うことも一理あると思ってその場を後にした。

その森から出るには優に1時間かかってしまった。その間、糺は  
キーホルダー(コマンドメンツと言っらしい)と話していたが、ここ  
はリリカルなのはと言っ世界の海鳴市と言っところらしい。そもそ  
もりリカルなのはと言っのは元の世界であったアニメらしいのだが、  
糺はそういう類を一切見ることが出来なかったため、もちろんこの世  
界は知らない。

そうなれば糺にとってそれは決定した物語でもなんでもなく、ただ  
の人生そのものだった。それはあれほど行くのを拒んでいた自分が  
主人公で、他が役者の世界と同じなのだ。それでも、糺はこのコマン  
ドメンツの様な不思議がこの世界にあると言っだけで、その事実は全  
く気にしなくなっていた。

とりあえず、と言っことで町に着いた糺はお金を口座から落として  
いた。この体なので声を掛けられるかとビクビクしたりしていたの  
だが、案外声を掛けられないものだ。無事に5万ほどの金額を落とし  
て財布に入れる。

本当はこういところで前世との時代の差と言っものを見つけれ  
れば良かったのだが、糺は訳ありで家から出たことがない。故に元  
の世界はどんなだったか、と聞かれても何も答えられないのだ。つま  
りこの世界との差は分からないのだ。

「取り合えず、資金はあるから飢えはしのげるとして、家だよなあ……」

とは言え、こればかりはどうすることも出来そうにない。

そこで、はあ、とため息を吐く。昔からそうだ。繰り返し繰り返し同じことを考えてしまう。前に進まなければならぬのに立ち止ってしまうのだ。せつかくの新しい人生だ。昔の考え方は捨てて、とりあえずはやれることから始めるとしよう。

「コマンドメンツ、いや、言いづらいからコマンでいいか？」

『マイロードがそう呼びたいのならそう呼んでください』

「分かった。……てかそのマイロードってのやめないか？」

『それは不可能です。マイロードは我が主<sup>マイロード</sup>なのでから』

「はあ、まあいいか。……じゃあこの辺にスーパード的な無いか？」

『それでしたらあちらに……』

コマンドメンツ改めコマンの道案内の元、迷うことなく目的地であるスーパードマーケットへ到着できた。糺は改めてコマンの凄さを実感した。ただ意思を持っているだけでなく、細かな情報も的確だ。この世界の人が皆持っているのであれば、元の世界よりも発達しているのは明白だろう。

スーパードが見えてきたところでキンと音が響く。金属を落としたような音に一瞬立ち止まる。

そこで隣を車椅子の少女が通った。年齢は今の自分と同じくらいだろうか、あの年齢で車椅子とは病気かなんかだろうか、とつい考えってしまう。しかし次の瞬間フラッシュバックが起こる。

暴走する車。

轢かれる少女。

燃え上がる炎。

そして流れる血。



いやな予感、いやいやな予知と言つ物だろう。だがこれは知っている感覚。生前使えた、もう使うことは無いと、絶対に使わないと決意した未来視。されど、この瞬間だけはありがたい、そう思えた。目の前で散るはずの少女を助けられるのだから。

「危ない！」

車椅子を掴み、その少女を止める。突如叫んだ糺に周りの人も驚いたようにこちらを見る。

「な、なんや!？」

急に捉まれ、止められたことに驚きつつも振り返る少女。だが次の瞬間に道路を走っていた車がトリップして歩道に、進んでいたら丁度少女が轢かれる位置につっこむ。少女はビクッ、と体を震わせ硬直する。無理もない、このまま進んでいたら轢かれていたし、下手をすれば死んでいた。

「なんやよつ分からんかったけど助かったわ……」

「あ、ああ」

そんな会話を交わすが二人共の視線はお互いの顔ではなく、その事故に釘付けだった。そのうちに周りの状況を理解しだした大人が携帯でどこかへ連絡する。救急車でも呼んだのだろうか。

そのうちに警察と救急車がやってきた。どうやらその車に乗っていた人も何とか無事だったらしい。救急車に乗せられ病院へ向かう。啞然としたままの二人。糺はこんな時でさえつい思ってしまう、もっと他にやりようがあつて、そしたらあの運転手も助けられたんじゃないかと。高望みなのは重々承知だった。それでも予知してしまったのだから助けたかつたと思うのだ。

「はあ、……あ、「じめん」

紬はいまだに車椅子を押さえつけていたことに気づきすぐさまその手を放す。その声は少女にも届いたようで、今度はその顔を紬に向けた。呆けたような表情だったが、その少女は同じくらいの子供としては可愛い方なのだろう。濃い茶髪のショートカットで瞳は綺麗な蒼だった。

「あつ、ありがとうな」

そう言っただけ少女は紬に向かって笑かける。その笑顔は紬にはとても眩しく見え、ドキッとしてしまった。だが、そんな動揺をおくびにも出さない。

「どういたしまして。それより、怪我は無いか？ 少し無理やり引張っちゃったから」

「いや、大丈夫やで。あ、そや。私八神はやてって言います。あなたは」？

「僕は真掛紬です」

「そか、紬君か。よろしくな。私の事も名前で呼んでな」

そうやって二人で自己紹介をして、その場から離れた。そこで紬は先ほどまで考えていたこと、衣食住の住の確保に思い当たった。もしかしたらマンションはダメでもホテルくらいなら借りられるのではないだろうか、と。考え経ったら即行動。さっそくその辺をはやてに聞いてみる。

「んじゃ、はやて。この辺りにホテルってないか？」

「え？ ホテルかいな。……あつたと思うけどどないしたん？」

「いや、住む家がないからホテルでも借りようかと……」

「あかんよ!! 家出しちゃあかん! 家の日と心配するやる!!」

住む家がない、と言うことを家出をしたので行くところがない、と言うふうには勘違いしたらしい。普通に考えたらそうなるのかもしれないが、糺の場合は文字通り家がないのだ。糺は一瞬何を言っているのか分からなかったが、その答えにすぐたどり着いた。

「んと、僕、親居ないんだよね。で、家もないからホームレスなんだ」

あはは、と笑いながらそう返す。そんな気軽そうに話す糺を見てはやはり何か思いつめた表情になる。さもそれが自分の事のように目に涙をうつすらとさえ浮かべていた。

「なんでや……なんでそんな話、平気でしてられるんや、寂しくないんか？」

「僕はもう慣れた。ずっと一人だったからな」

そう返すがはやてはさらに悲しそうな表情になる。そして絞り出すように発する声はどこか消えてしまいそうな儂さがにじみ出ていて、さっき自己紹介をしたときにいた元気な少女の姿はどこにもなかった。

「私も両親いないんや。……でも、私はいつまでたっても寂しいんよ。でも私、この足動かへんのよ。そのせいで学校にも行けん、せやから友達も出来ん。いつつも思うんよ、家族ができたら……」

そんなはやては正直見てられない。さっき会ったばかりだとしても、その顔を見てると胸を締め付けられるような気になる。だからなのかもしれない。こんなことを口走ってしまったのは。

普段の糺ならば絶対に口にしないだろう言葉。

初対面のあったばかりの人に言うには不相应な言葉。

体が縮んだせいで思考までも単純になっているのかもしれない。

「だったら、僕と家族にならないか？」

まるでプロポーズ。一生を誓い合う相手に言うようなそんな言葉。

その言葉をはやてはどろどろ取ったのだろうか。

その顔は糺に向けられているがさっきまでの様な悲しそうなの表情ではなく、呆けているような表情。それでも迷惑そうな表情ではない。そしてはやては一言だけ。

「ほえ」

## 百戦錬磨の力

はい、と返事をされてしまったものの、全く持って先のことを考えていなかった糺はつい硬直してしまつ。それはとっさに返事をしてしまったはやても同じく、プロポーズの様な言葉にプロポーズのように答えてしまい、赤面して固まっていた。そしてお互いの顔を見て、

「つぷ、あはははは」

二人そろって笑い出した。はたから見ればそれは恋人のように、兄妹のように見えるかもしれない。だがこの二人は紛れもなく先ほどであつたばかりの二人なのだ。

「ははは、あーあんなこと誰にも話したことあらへんかつたのに、なんでもやらな。つい話してもうた」

「僕もあんな恥ずかしいことを……」

それでもその居心地の良さは二人とも感じており、だからこそ誰にも言えない心の内を言えたのだろう。

「いや、私はうれしかったんよ。……それで、さっきのもしよければやけど、ホンマに家住まへんか？」

「え？ いいのか？ さっき出会つたばつかのやどこの馬の骨とも知らん男を？」

「ちやうちやう、さっき出会つた命の恩人や。悪いわけあらへん。それに言つたやろ、寂しいって。私は大歓迎なんよ」

じゃあ、お言葉に甘えて、と糺はお世話になることにした。しかして糺は衣食住の住を手に入れたのであつた。

はやての家。一戸建てで一人で住むには十分すぎる、寧ろ大きすぎるそれはいまだに使わない部屋は多く残っており、糺の部屋を作ってもらうには十分すぎる物だった。車椅子でも住みやすいようにバリアフリーになってはいる物の、2階へはいけないようで1階しか使っていないようだ。糺は空き部屋のある、むしろ空き部屋しかない2階の1室を使わせてもらう。使わないだけあって誇りが物凄いため掃除すべきだろう。だが今はまず部屋の確認だけして、はやてのもとへ向かう

「2階、すごい事になっていたぞ」

「アハハハ、2階行けんから掃除できへんもんな。私の担当医の石田先生がたまに来るんやけど、最近来てへんからなあ」

「んじゃ、掃除するか」

「え？ 頼んでええん？」

「自分が暮らす部屋がほこりまみれじゃ絶対に病気になる」

それもそつやな、とはやては返して掃除道具が入っている場所を示す。とりあえず、バケツ、雑巾、ホウキ、チリトリをもって2階へ上がる。この汚れ具合から見るとかなりの長丁場になりそうだと一人苦笑いをするが、それでもやらないなどと言う選択肢は存在するわけもなく、掃除を始めるのだった。

知識で掃除と言うものは知っていたものの、実際に掃除などしたことがなかった糺は悪戦苦闘しながらも掃除を進める。

「ああ〜これは肩がこるな」

などと何とも年寄り臭い台詞も吐きつつも2階を隅々まで掃き終わる頃にはすでに日は山の向こうへ暮れて行きそつだった。そこへ、

「糺君！」「ご飯出来たでえ！　ひとまず食べて休憩しようや」

1階からはやての元気な声が響いてくる。正直色々と限界だったりしているためその言葉は助かった。分かった、と軽く返事をして、一旦区切りをつける。

食卓へ着いた時には既にそこには美味しそうなご飯が並べられていた。とても小学生が作ったとは思えないような料理に素直に、うまそうだな、と感想を述べる。はやてはその反応にまず満足したのか満面の笑みを浮かべる。

「そうやる。料理得意なんや。さ、食べてな」

「ああ、いただきます」

おかずを一口頬張る。その味はもちろん見た目に違うことなく美味しく、つい涙がこぼれる。

「ど、どうしたんや!?　不味かったんか!」

「いや、美味しい、今まで食べたことがないくらいうまいよ……」

涙を見たはやてがおろおろする。糺は涙を止めたいが、それは出来なかった。今まで、生前食べるものなどはすべて不味い物ばかりだったのだ。どこかの残飯の様な、失敗作の様な、ゴミの様な食べ物しか与えられなかった糺にとってそれは初めて食べた料理と言っても過言ではないのだろう。そのあまりの美味しさに涙が止まらなかったのだ。

「大丈夫かいな、急に」

「ああ、大丈夫だ。心配してくれてありがとう」

そう笑って対応する。それでも涙は止まっておらず、おかしな顔に

なっていたことだろうと糺は思う。

数分後ようやく涙は止まり、はやてと談笑しながら食事を済ませた。先ほどまで泣いていたようには見えないほど晴れた表情をしている糺にもつ心配はないとはやても思っていて安心しているのだった。

食器洗おうかと糺は言うがはやて曰く「方付けも含めて料理や」と言うことで片づけもはやてがすることになった。すこし、悪い気もしたが、こちらも2階の掃除がまだ終わってないのでそちらに再び取り掛かる。ほつきは終わっているので残すのはあと雑巾がけだ。だが、掃除で一番大変なのは何を隠そうこの雑巾がけ。2階で雑巾掛けしなければならぬのは部屋3つに長めの廊下と言うきわめて重労働だと言えるだろう。

全てを掛け終わる頃にはすでに9時を回っていた。

そこにズンと何かがのしかかるような衝撃を受ける。得体のしれないそれは何か不気味だった。

『マイロード、なにやら強大な魔力が暴走しているようです』

今までは無言を貫いていたコマンの声が入る。しかし、急にそんな魔力と言われても糺には何のことなのかさっぱり分からない。どういふことだ、とコマンに尋ねる。

『まずは現場に行きましょう。さあ、ハリーハリーハリー！』

「わ、わかったよ」

やや性格が変わっているコマンに急かされるように2階から降り、はやてに断りを入れて外に飛び出した。

『ちゅあ、目的地は動物病院付近です』

コマンの案内の元その目的地に行く。そこにはすでに人知を超えたものが待っていた。



黒い暴れる物体。

スライムのような無形のそれは目と口しかなく、猛スピードで突進していた。その目的と思われるのは一人の少女。

『マイロード、どうしますか？ 助けますか？ スルーですか？』

ここまで来て何を言っているんだと糺は思う。目の前に襲われている人がいるのに助けがないなんて糺には考えられなかった。たとえそれが偽善だと言われようともやらない善よりはましだと思っただ。

『分かりました。そのための私です。パスワードを繰り返してください』

「は？ パス？」

『繰り返してください。』

我、古来より受け継がれし裁きの手なり。契約の元その力を解き放て。歴史は時に、想いは空に、十の掟はその手の中に。コマンドメンツ、セットアップ』

「意味は分らんが、まあいいだろう。」

我、古来より受け継がれし裁きの手なり。契約の元その力を解き放て。歴史は時に、想いは空に、十の掟はその手の中に。コマンドメンツ、セットアップー」

刹那、まばゆいばかりの光に包まれる。黒い物体も、それに襲われる少女も同時に糺の方を見る。

その光が消えた先にいたのは紛れもなく糺。だが服装がまるで変っていた。白いロングコートを着込み、手には手袋をはめている。街中にこんな服がいたとしたら誰もが2度見してしまうことだろう。それほどまでに異端な服装だった。

『わあ、マイロード、倒してしましましょう、ダブルセイバーフォームです』

そう糺が言うと足元に白い光の線で三角の魔法陣と思われるものが現れ、その中から2振り1対の刀が出てきた。どちらも小太刀のため長さは等しく、それでも成長しきれていないその身体には不釣り合いだった。

「君も魔導師なのかい!？」

少女の方に乗る動物が大声を出す。糺の位置からは遠くてよく見えないが、イタチか何かだろう。少女の方は信じられないものを見たかのように固まっている。

黒い物体は標的をその少女から糺に移した。何もしないものよりは、害意のあるものから先に、と言うことなのだろう。電柱をも折った突進を繰り返す。

だがそれを前に糺は恐怖など微塵も感じていなかった。それは立続けの出来事に感覚がマヒしてしまったのか、それとも……

『来ます』

コマンの声の直後、糺のいた場所に黒い物体が激突した。それはコンクリートを割り、地を抉っていた。が、そこに糺の姿は無く、彼はすでに上空へと逃げていた。

その物体が地に激突したことを確認すると次はそれに向かっていき、両手の刀で切り付ける。元の力だけではそれはかなわなかっただろう。だが、今は魔力で体を強化しているため、やすやすとその一対の刀を振ることが出来ていた。

動く。思った以上に。その感覚に糺は興奮を覚える。いまだかつてこんな運動、こんな戦いなどしたことは無い。それなのに体は動く。まるで真まで幾度も幾度も繰り返してきたかのように。

糺は思い出す。神の特典を。確か、あの中にもこんなのは無かっただ

ろうか。

「百戦錬磨」

百戦錬磨とは幾多の実戦で鍛えられること。または多くの経験を積んでいること。つまりこの能力は多くの「経験値」ではないだろうか。そのおかげで戦闘をやすやすと繰り広げられる。特典と言うからには全て何か特別な動作で発動するものだとばかり思っていた。しかし、なるほどと糺は思う。このような常時発動の特典もあるのだ、と。

「強い……！ 君、封印は出来ますか!？」

イタチから糺にその声が届く。しかしながら、糺には封印とは何のことなのか全くわからない。故に首は横に振っておいた。それを見たイタチは少々がっかりした様子で少女に何か話していた。

と、ここで、切り飛ばした黒い物体が復帰する。しかししてくるのは単調な突進のみ。動きを読み切れればかわすことも難しくは無い。避けて切って、力の方向をずらす。これならば負けはしないだろう。だが、決め手に欠けるため、それを倒すことが出来ずにいた。

「君！ ちょっとその怪物押さえつけて置いて」

その声が響く。そちらを見ると先ほどとは違う服を着た少女とその手に持つ杖のようなものが見えた。やることは全く持って予想はつかないが、イタチはやると言っているのだ。どっち道倒すことが出来ないのだから、信じてみるのもいいだろう。そう糺は思い、「コマンに尋ねる。」

「何か押さえつけるのは無いか？」

『バインドならあります』

「拘束？ それで行こう」

『詠唱は分かりますね？』

「えっと、これか。」

「天より墮ちよ、鎖の枷の下に」

『Kette Falle』

その声と共に現れた鎖の様な魔力で黒い物体をからめ捕る。黒い物体はもがくがそれはきっちりとそれに巻きついていてそのため全くほどけることは無い。

「リリカルマジカル、ジュエルシールド封印!!」

直後、少女のその声が聞こえる。少女の杖から出た光線のようなものが怪物に当たったかと思うとそこには何も無く、あるのは空中に浮かぶ一つの蒼い宝石だけだった。

一息ついたかのような表情をしたイタチと少女はそのままこちらにやってくる。

「ありがとうございました。えっと君は……」

「あなた凄いね!! あんな綺麗に戦って! 私少し見惚れちゃったよ」

イタチの言葉にかぶせるように少女はそう捲し立てる。例はそれに若干引きながらも、迫ってくる音に気が付いた。あれだけ派手にやっていたんだ。誰も気づかないほづがおかしいものである。

「えっと、その前に移動しないか? 警察着そうだよ」

「えっ」

二人(?)とも驚いたような顔をした後、少女は一目散に走ってその場を後にした。とはいっても少女、それに運動が苦手なようでその

足はお世辞にも速いとは言い難く、すぐに追いついて並んで走る。

そこから向かったのはその近くにある公園。夜だけあって周りには誰もおらず、静けさがその場を支配していた。

「僕は真掛糺。君は？」

「あつ、ごめん忘れてた…… 私は高町なのは。よろしくなの」

「僕はユーノ・スクライア。スクライアは部族名だから、ユーノって呼んで」

「糺君にユーノ君」

えへへ、と笑うのははさつきあんなことがあったというのにその顔にはまったく同様の色は見れず、何事もなかったかのようだ。これはマイペースというのだろうか、それとも神経が太いと言うべきなのだろうか。

自己紹介も済んだところで、ユーノが至極真面目な声で話し始める。

「あなたたち二人を巻き込んでしまい、済まない。ほんとに僕一人でなんとかしなきゃいけないんだけど……」

「どついつことだ？ まったく状況が呑み込めない」

「位置から説明するね。さっきの怪物は、ジュエルシードと言って、もともとは人の願いをかなえるために作られた一古代の遺産。ロストロギア なんです。それを僕たちスクライア一族がこことは違う世界で発掘したんです」

「違う世界、ということは他の世界もあるの？」

「はい、世界は次元を挟んで無数に存在しているんです。その次元をわたっているときに事故が起きてしまい、全て、21このジュエルシードが……」

「この世界、てかこの街に落ちてしまった、と言うことだな」

「はい…… 情けない話ですが…… だから僕がすべて回収しないとけないんです。僕のせいで迷惑かけるわけにはいきません」

と、ユーノのその決意は固いようで、聞いている分には別にユーノの性とは全く持って思えないのだが、糺だそう言ったところでそれを止めるなどと言う選択肢は全くないのだろう。それなら、と糺は言う。

「分かった。巻き込まれた好みだ。手伝ってあげるよ」

「え……？ でも」

「でもないよ。ユーノ君一人ぼっちで助けてくれる人いないんですよ、一人ぼっちは淋しいもん、わたしにもお手伝いさせて。困っている人がいて、助けてあげられる力が自分にあるなら、そのときは迷っちゃいけないって。これ、うちのお父さんの教え。ユーノ君は困ってて、わたしはユーノ君を助けてあげられるんだよね。なら手伝いたいな」

「そうだ、それにそんなこと一人で抱えていたらいつか潰れるぞ。もうユーノとは他人じゃないし、いつでも頼ってくれ。僕にできることなら微力を尽くそう」

「なのは、糺……ありがとう」

そう言っただけユーノは深々と頭を下げる。そこでなのははハツとした様子で声を上げた。

「いけない！ 私断らないで出てきちゃったの！ 早く帰らないと」

「ユーノはどうする？ 高町の家に行くのか？」

「ユーノ君はうちにおいでよ。家族にもう話しちゃったし」

なのははユーノを抱えるとパタパタという擬音が付きそうなほどせわしなく帰っていった。時間は既に10時。子供が散歩には遅すぎる時間だ。警察に見つかりと面倒なことになると思い、糺はこっそり隠れながら帰路へ着いた。

「そう言えば、なんであの詠唱僕が分かったんだ？」

帰宅途中、時間がないために保留にしていた疑問をコマンに投げかける。数秒の空白の後、コマンから帰ってきた答えは、

『百戦錬磨、あれは戦闘の経験を得るだったので、もしか私の使える魔法の詠唱を知っているのではないかと思いました』

つまりあの百戦錬磨という特典は、このコマンを使った戦闘の経験を得るもので、コマンが使える魔法、およびコマンで使える技をすべて使えるということだ。

なるほど、と糺は思う。確かにあの詠唱は気づいた、と言うよりも思い出したと言う感覚に近かった。すでに知っているものだったと言ふこと。

「んじゃ、他にも色々使えるんだな。……どんなのが分からないし今度試し撃ちでもしようか」

『それが良いかと思えます』

「あいよ、じゃ、早く帰るか」

それっきり二人の間には会話は無くなったが、糺はこういう沈黙は嫌いではない。家まではもう少し。早く帰らないと流石にはやても心配するだろうと思ひ、足取りは心なしに早まっていた。

「遅い!! 何してたんや!!!」

帰ってそうそう糺ははやてに説教をくらっていた。それも玄関先で正座させられて。家を出て行って1時間ちよつと。それだけ見ればそこまで遅くは見えないかもしれない。問題は時刻だ。9時に出

て良き、帰りは10時過ぎ。10歳未満の子供が一人で出歩くには遅すぎる時間帯だ。

「すみません……」

糺自身自分に非があることは分かっていたので反論も出来ずに平謝りをする。とは言え、説明しようにも到底出来る物ではないのでどっち道謝るしかないのだが。

「大体な、一緒に住むと決まった日から、理由も説明せんでどっか行っくてどっかいうこっかちゃんねん!」

「断り入れました」

「そう言っつこや無いんや!!」

そこまでは強気だったはやての表情が一気に曇る。何かを思いつめたような、そんな表情に。自分は寂しいと打ち明けた時のような表情に。そして意を決したようにはやては言っつ。

「……私、心配だったんよ。糺が帰ってこんのやないか、どっか行っつてまっつんやないかっつて」

「そんなわけないだろ。今日ここに住むって決めたばっかだぞ」

「だから余計にな、全然家族って感じや無いんやんか。だからこんな繋がり、プツツって切れそうやんか」

はやては家族と言っつものに強く憧れる。自分は持っていないものだから。だから、やっとできた家族がうれしくて、うれしくて仕方がなかったのだ。それでも心のどこかにはまだ大きな不安があるのだらう。この家族つながりはいつの間にか消えてしまっつような、無くなっつてしまっつようなちっつぽけなものなんじゃないか、と。

そう思うと糺はいてもたってもいられなくなった。この元気な姿は不安の裏返しなんじゃないか、本当の自分を押し殺して元気に振



舞っているだけなんじゃないか、と。そう思うと途端にはやてが儂く、すぐに壊れてしまいそうなものに見える。

そんなはやてを糺はいつの間にか抱きしめていた。

「わっ、ね、糺、どうしたん？」

驚いたような声を上げるはやては既にいつも通りで、そんなはやてに糺は言葉を紡ぐ。こんなに小さなはやてを安心させたくて。

「大丈夫だ。僕はもうはやての家族だ。どこにもいなくなったりしない。消えたりしないから、安心して。これから同じ家で、一緒にご飯食べて、一緒に笑い合って、毎日を一緒に過ごすんだ。だから僕ははやての家族だ。これからずっと。約束するから」

そう言いきる。はやては何も言わない。それでも震える手の感覚が伝わってくる。そしてはやては顔を上げて、震えた声で。

「糺、ありがとう」

はやても糺に抱きついたままそう言った。

それから十分後。ようやく収まったはやてと糺はいまだにさっきと同じ場所にいた。

「よくも泣かしてくれたなあ、われえ」

「えええ〜…… 話の流れ、違くない？ さっきの話から捻じ曲がってんぞ」

「ははっ、冗談や。まあ、さっきも言ったんやけど、ありがとうな」  
「ああ、気にするな。家族だろ」

そうやな、とはやてと糺は笑いあっていた。そこにはさっきまでの

しんみりとした空気は無くなっていた。

「と云うわけで一緒に寝ようぜ」

風呂から（もちろん別々に）上がったところで、糺ははやてにそう言われる。その台詞にドキッとしなかったと言えば嘘になるが、その前に言うことがある。この台詞の前に会話をしていたわけでもなく、第一声目がこれである。つまり、言いたいことと言うのは、

「いや、何がと云うわけだ。」

と言う使い古されたようなセリフである。そもそも夜、気持ちよく寝るために糺は2階を大掃除したと言うのに、それではまるで意味がなくなると言うものだ。

「ダメなん？」

今ので否定したつもりだったが、はやてにそう上目使いで迫られるとつい、決意も揺らいでしまう。

だが、それでも糺は頑なにそれを拒む。

「だ、ダメに、決まって、いる……だろ」

「今、迷ったな。交渉の余地ありと見たで」

……頑なではなかったものの何とか断った。それがはやてに付け入られるスキとなる。糺の返しにニヤリとしたはやては、最後の手段とばかりに、上目使い＋涙目・甘えた声で、

「家族やる？」

「うっ、か、家族でも、だ、ダメ、だ」

何とかはやての攻撃を凌いで断る。はやてはぶっつと口をとがらせる。しかし糺も譲る気はないのだ。そもそも、今まで誰かと一緒に寝るなんてことはしたためしがなく、正直恥ずかしいと言う気持ちが大半なのだった。

「じゃあ、もう良い時間だし寝よう！」

「え、ホンマにダメなん？」

「おやすみー」

いまだに食い下がっているはやてを若干スルーしながら糺は二階へ向かう。下からイケズー！ と言うはやての声が聞こえたがそれには完全にスルーして寝に入る。その時の時刻はすでに11時を回っていた。

転生をして1日。11月でようやく、初日にしてはやけに濃い1日がようやく終わった。

## 日常と非日常

翌朝、いきなりの出来事に疲れがたまっていたのか、少々寝坊をしてしまった。とは言っても朝8時。学生の休日などはこんなものだろう。下手をすれば昼間で寝ている、なんて人もいるかもしれない。とは言っても、下に降りてみれば、すでに朝食の準備は済ませており、はやては糺を待っていたのかテーブルについてテレビを見ていた。そのはやても糺が降りて来たことに気付いたのか、顔を糺に向ける。

「おはようさん。起こしはしたんやけどやっぱ1階からじゃ声届かへんか」

「おはよう。すまん、明日からは気を付ける」

「そやな、朝は毎日7時にとってたんよ。合わせられるか？」

それなら大丈夫だ、とはやてに返しながらテーブルに着く。事実、糺は以前まで朝6時に起きていたのだ。今朝はやはり慣れない環境だったから疲れがたまってしまったのだろう。明日からはそこら辺はきちんと合わせられるはずだ、と糺は考える。

「いただきます」

「いただきます」

二人そろって朝食を食べ始める。冷めてしまっているが、それでも十分においしい。

「やっぱはやての料理、うまいな」

「そんなことあらへんよ。もうずっと一人やったから慣れとるだけやで」

そんな些細な会話をしながら朝食を食べていく。二人とも話をしながらも、20分と掛からずにすべての料理を平らげてしまった。

「はやて、今日はなんか予定あるのか？」

ふと、はやてにそう聞く。糺自身にはこれと言った用事は無いために時間がある。はやてに用があるならそれについて行くかどうかと想っていたのだ。

「んとな、昨日図書館行くつもりやったんやけど行きそびれたから、今日行くか思ってるん。一緒行くか？」

「ああ、どうせ暇だから行くよ。本も嫌いじゃないし」

これは事実だ。糺は以前から本だけを与えられていたために同じ本を何度も繰り返し読んでいたのだ。自分と違って自由なその本の主人公たちに胸を躍らせたものだ、と思うが、ふと思う。今の自分はその本の主人公の様に自由ではないか、と。そう思うと少しうれしくもあった。

「ほな、行くのは9時ぐらいや思いつから準備しててな」

二人そろって「ごちそうさま」と言って食器を運ぶ。洗うと言ったがやはりはやてには断られてしまった。こうなったら料理作れるようにして少しでもはやてに楽をさせたいと糺は思う。流石にいつまでたってもしてもらってばかりだと少し肩身が狭い思いなのだ。

それから30分後、はやてと糺は家を出る。目的地は市立図書館である。糺ははやての車椅子を押しながらなので顔は見えないが、それでも楽しそうにしているのが分かる。誰かと図書館に行くと言う経験がないためにうれしいのだろう。そんなはやてを見てみると糺までもが楽しみになってしまおうと言うものだ。会話をしながら糺は目

的地まで進む。

それを見つめる影が一つ。世にも珍しい物を観察するような目でその目は糺を捉えていた。はやての家の上で、仮面を被ったそれは静かに風にかき消されるように小さく一言のみ言葉を発した。

「闇の書が目的か？」

その問いの答えはいらない。彼が魔導師だと言うことは分かっているのだから。

図書館でははやては数冊の本を持って席に着く。はやて曰く、昼までの3時間はここで過ごすらしい。糺もそれにならって、興味のある本を適当に探し、はやての向かいへ座った。

すではやては本を読み進めており、礼のことは気づかなかつたようだ。すごい集中力だと感心するが、糺もそれは人に言えたことではないかもしれない。実際親友には集中力が無駄に良いと言われた記憶がある。

1時間ほどそうやって過ごしただろうか、ふと顔を上げるとはやても糺を見ていた。

「どうしたんだ？」

「いや、すごく集中しとったから、気づくかなあって」

「……ちなみにどれくらい」

「ん〜5分くらいいな」

「マジか、気づかなかつた」

「うつして顔を上げたのだから偶然だったのだ、下手したらずっと気づかないままだったかもしれない。そう思うと糺は内心自分に苦笑

した。

「やっぱり。私も集中していると周り見えんようになる、って言われるけど、糺も負けとらん見たいやな」

「あ、僕もさっきそう思ってた」

「なんや、意外と似た者同士なんやな、私ら」

だな、と二人はまた笑いあう。それっきり会話は無くなってしまったが再び各々手に持つ本に目をやり始める。1時間ほどですでに半分まで読み終わった糺は、はやてはどれくらいだろう、と思い一寸目をやる。そこには二つに分かれた本の山。糺が座ったときは一つの山だったから、分けてある1冊はもう読み終わったんだらうか。

「なんや、どうしたん？」

そう思いながら少しだけのつもりが見つめ続けていたようだ。はやては糺の視線に気づきそう言っ。

「いや、もう1冊読み終わったのかなって」

「ああ、そやで。もう本読むの早よなってな。こんくらい朝飯前やで」

「へえ、すごいな。僕はまだ半分くらいだ」

「十分やないの。普通の人はもっと遅いんちゃうかな」

そんな会話を途中途中に入れつつ本を読んでいるとあっという間に残りの2時間はたってしまった。結局はやては持ってきていた3冊と言う量の本を3時間で読んでいた。平均から見ても早い方だろう。糺は3時間で1冊ちよつど読み終えたところだった。

12時になり腹も減ったと言うことで糺とはやては図書館を後にする。

昼食を食べ終え、午後からは一人は別行動になった。はやては病院に行くらしい。足の病気のせいで何日かに1回通つてるとのことだ。紬はその間暇になったため、この街をぶらぶらと散歩をするつもりだった。

「あ、忘れてたけど、着替えとか買わないとなあ」

独り言をこぼしながらも目的を決める。どっちかと言えば散歩のついでに買い物、と言つぷつになつていようだ。ショッピングセンターのある中心部へと歩きつつも周りをもの珍しそうに見て回る紬。こんなふうに出歩くのはまだ多くは無いため、興味を引かれることばかりだ。

日常と非日常の境と言つものは、この世界に来てから非常にもろくなつた、と感じる。もっとも前の世界での日常は酷いものだったが。今の今まで普通に歩き、普通に散歩をしていた。しかし次の瞬間あたりは一変した。景色は変わらない。されど、雰囲気はガラリと変わる。人間が自分を除いて誰もいなくなつたのだ。一寸の混乱の後、頭上から声が響く。

「貴様の目的は闇の書か？」

声のした方を見上げるとそこには仮面の男が立っていた。否、浮かんでいたと言つ方が正しいかもしれない。空中にとどまるそれは、紬に対し殺気を飛ばし、今にも襲いかかつてきそうなほどだ。

その仮面の問いは、問いであるにもかかわらず問いではなかった。答えようと答えまいと殺す。そうその仮面の殺気は言っている。

『マイロープ』

「ああ、『マインドメンツ』、セットアップ。

ダブルセイバーフォーム  
—— 刀 ——



「コマンに急かされるように展開し、その仮面と対峙する。白いロングコートを着込む糺の手には既に両手には刀が握られており、いつでも戦える準備をした。しかし次に言葉を発した仮面は驚いた様子で声を上げる。」

「その魔法陣にデバイス…… ベルカの十戒だと…… 貴様それをどこで?」

そんなことを聞かれても、もちろん糺は知らない。だが、ここでそう素直に答えるのも癪だった。糺は仮面を挑発する。

「そう言うことは勝ってから聞くものじゃないか?」

戦士なら、戦い、拳をぶつけ合い、問答をするのが道理。糺が言ったのはそういうことだ。その返しに意表を突かれたのか、仮面の男は軽く鼻で笑い、拳を構える。

「フツ、良いだろう。行くぞ!!」

それを合図とばかりに、両者、ぶつかり合う。仮面の男は無手だったがそれを魔法で強化しているようで切れることは無い。1撃2撃3撃と入れていくが、相殺し、相殺され、どちらも有効打を与えられない。

「フツ、挑発するだけのことはあるようだな」

「それはどうも」

憎まれ口をたたき、距離を取る。両者ともに接近クロスレンジ戦闘のためこの距離だと攻撃は出来ない。そう糺は考えたのだが、

「攻撃できないとでも思ったか。何のための魔法だ! フープバイン

「ド」

「しまっ……っ!!」

その声と共に現れる3重の輪によって体が固定される。足は固定されていないものの手が動けないために攻撃も防御もできない。バインドこそ簡単なため楽に抜けることはできるがそれでも多少の間はかかる。動けないスキに、と言うように仮面は接近し攻撃を加える。

「……くっっ!!」

1発殴られることによる激痛。ただ殴られる物よりも魔法で強化してあるために数段重く痛い。しかし2発目、以降を避けることが出来、その間にバインドも抜けだす。

瞬時に5メートルほどの距離を離し、刀を両腰の鞘に収める。刀の中で最速の技。敵を殺すための居合を出すために。足元に白く三角の魔法陣が広がる。

「<sup>イ</sup>居合 <sup>ヒ</sup>飛閃！」

その5メートルも離れた場所からの居合。普通ならそれは届くはずもなく、されどそれは普通ならである。この居合は一閃の斬撃をも飛ばす居合。故に飛閃。その刹那の斬撃は5メートルと言う距離を瞬く間に喰らい、仮面に迫る。

「ホイールプロテクション」

タッチの差だった。一瞬速かった仮面の盾が斬撃を受け止め消した。だが、糺はそれを見越して、次の技に入っていた。既に展開された魔方阵からは、先ほどよりも強い光があふれている。

「エンブ 演舞 トツレン 突煉 !!」

その距離を今度は自ら動き一瞬で詰める。そこから間髪入れず、そのスピードのままの4連撃。止められるはずがない。先ほど防御を展開したばかりで今はその直後なのだ。とっさに両手でガードするも空中では踏ん張りが利きにくい。仮面はその4連撃をくらい、地に叩き落された。

「クッ、やるな」

だが、そのダメージが無かったかのよう立ち上がる仮面の男。その力の差はどちらが強いわけでもなく、拮抗していた。これは大技を使うしかないか、と思った糺だが、仮面はその身をひるがえした。

「お前には聞きたいことがあったが時間のようだ。闇の書、とは関係ないようだしな」

それだけ言うとその場から転送したのだろう、一瞬で消えてしまった。それと同時にその場に張られた結界は跡形もなく消え去り、戦闘をした跡はきれいさっぱりと消えてしまった。

一息ついた糺だったが、今の自分の姿を見てあわてる。この奇異な姿で見つかったのは見つかってしまっはまらずいと、特にはやてに見つかつてしまっは。すぐさま地面に降りて、そのバリアジャケットを解除する。

「全く、なんだったんだ？ 闇の書とかベルカの十戒とか」「ベルカの十戒についてはお答えできます。それは私の名から取った古代ベルカ時代の通り名です」

全く返答を予期していなかった独り言に「マン」が答える。

「え？ お前って昔からあったのか？」

『はい、私が消滅しかけたところをトラン様に拾われたのです。その時の主はもうすでに亡くなりましたが、その時に私は主と共に“十戒の騎士”を名乗っております。私の名と能力から取られたようですね』

「えっと、お前の能力って？」

『今はどうか知りませんがあの時代には世界最多の戦闘体型を持っておりました。その数10。今まで使っている初期の無手ノーマルと刀のダブルセイバー』

「へえ、じゃあれか、どんな敵が来ても大丈夫だぞ、と」

何とチート臭い、と糺は思ったが、それでも自分の持つものなので文句は無い。たった2日でこんなに騒動に会っただから、手札は持つだけ持つに越したことは無いのだ。

その話をしているといつまでも先に進めないような気もしたので糺はその辺で話を打ち切り、当初の目的だったショッピングセンターへと向かった。

## もう一人の魔導師

はやての家に居候をして、否、はやての家族になってすでに2週間の日が流れた。その家での生活にはすでに慣れ始めていた。

初日はともかく、それ以外は6時に目が覚めてしまう糺だったが、暇な時間をもてあそばせるわけにもいかない、と言うよりも、暇が嫌だった糺は、今では毎朝ランニングに出かけている。いまだ見たことのない場所も走って見れるし、トレーニングにもなると糺は大手を振って毎朝1時間走っている。

「ただいま」

「おかえり。もう朝ごはん出来てるでえ」

今日も時間どろりに帰ってきた糺を迎えるはやて。その姿ははたから見ればすでに夫婦の様な光景だったが、当の二人はそれに気づいていなかった。

今日も二人そろって食事を始める。もう何日も続いている光景だ。あれから2週間たったわけだが、ジュエルシードの方はと言うと、礼自体あれ以来ジュエルシードの方には行っていない。行こうと思ってもすぐに事態は收拾してしまつたため、もしくはちょうどはやてと一緒にいた時だったため行くことが出来なかったのだ。だが、逆に一人で収集出来るようならと別段なのはの方に行かなくてもいい気が始めているのは確かだった。

「糺、今日も午後から図書館行くと思うんやけどどないする？」

食事も今食べ終わると言う時にはやてにそう言われる。図書館と言えば、昨日も行ったばかりだった。とは言え、特にすることもないので、やることと言えばそれくらいになるのだろう。だが、糺としては、流石に2日も続けて汝官も本を読み続けられる精神力は無い。

「あー、僕はじゃあ、適当に散歩でもしてくるよ。午前中はいつもどうりっ?」

「そやね。糺は2階よろしくやね」

やんわりと断っておく。

そして午前中の予定は掃除である。毎日やるわけではないが、流石に2日に1回はやるべきだろうと言ったことになっている。はやては1階、糺は2階と、早く終わったらはやての手伝いである。

食事も終わり、食器を洗う。これは最近になって糺も洗うことになっていった。はやては最初、一人で洗うと言い張っていたが、妥協案として一緒に洗うことを提案したら渋々ながら了承してくれたのである。今では、すでにノリノリで洗ってはいるが。

「うっしや、これで終わりやな」

「だな。じゃあ、掃除しますか」

食器洗いを済ませた二人は掃除に取り掛かる。たかが2日と侮るなかれ。使っていないくとも結構ゴミと言ったものは溜まりやすい物なのだ。

午後になり、糺は出かける。行くところは決めてはいないのだが、すでにこの辺りはほとんど見終わっているので、少し遠出でもしようかと考えていた。とは言ったものの、半日なので、隣町までが良いところだろう。

「やて、走りますか」

そう呟いて走り出す。空は真っ青に晴れ渡り、散歩日和と言ったもの

だ。しばらく行くと海も見える。この海鳴市は森もあり、海もありと自然豊かな街なのだ。

のんびりとした様子で走ることに数十分。そののんびりとした空気はコマンの一声によって壊される。

『マイロード、ジュエルシードです。ここから近いですが、行きますか？』

ジュエルシードが発動する。そしてその直後、あたり一面に結界が発動する。

「これは行くしかないでしょ。コマンドメンツ、セットアップ」  
『イエス、マイロード』

すぐさまセットアップして、ジュエルシードのもとへ飛ぶ。比喻でもなく、文字通り、背に翼の魔法を生やして。既に結界内のため糺は全力で、その中心へと急ぐ。

そしてジュエルシードが発動した地点に行くと、そこにいたのは、

「ね、猫!？」

大きくなった猫だった。おそらく願いをかなえるジュエルシードが、捻じ曲がって願いを叶えることは無く、正しく願いを叶えた結果なのだろう。願いは大きくなりたい、だろうか。

そして、次に見えたのはなのはと、もう一人の金髪の魔導師の戦闘だった。

互いに睨み合い、すきもなく構えている。だが、それでもそののはともう一人の魔導師との力の差は歴然で、負けるだろうと言うことが容易に予想された。それほどまでにもう一人の金髪の魔導師は堂々として、その魔導師と言うものが様になっていた。

糺はその戦いに邪魔したら悪いと、物陰に隠れて見ていることにし

た。

じつとどまっただま動かない二人。その拮抗を崩したのは、金髪の魔導師だった。自分の杖を鎌状にした魔導師はなのはに向かって突進をする。素早い動きで足元をすくうように刈るが、なのははそれを飛んで避けることが出来た。その離れた距離を埋めるように、魔導師は遠距離攻撃を繰り返し、その隙に激突する。

「なんで……？　なんで急にこんなー！」

絞るようになのははそう問うた。その問いにもう一人の魔導師は、つぶやくような力ない声で一言。

「答えても、たぶん意味がない」

そのまま鏢迫り合うようにして距離を取る。なのははまだ魔法を使い始めて間もないだろうに、すでにその魔導師とやりあうことが出来ていた。

最初の位置に戻った二人はどちらも遠距離の魔法をためる。一瞬でも気を抜いたほうが、負ける。はたから見てもそんなのは分かっていたはずなのだ。それでも、なのはに合ったのは油断だろうか、一瞬、動いた猫に気を取られたのがいけなかった。目を離れたスキにと、魔導師は魔法弾を撃ち込む。その爆風でなのはは宙を舞った。

「って、やべー!!」

その戦闘に見入っていたために一瞬おくれたが、それでもなのはを受け止めるだけなら余裕だろう。展開しっぱなしだった飛行魔法でなのはの下に行き、落下するなのはを受け止める。

「誰？　あなたもこれを？」



急にあらわれた糺に対して魔導師はそう問いかける。それに対しても糺はいたって冷静な口調を装う。

「人に尋ねるときはまず自分から、ってな。君の名前は？」

「そう、ならいい。倒すだけ」

そう言って名乗ろうとはせずに、糺に向き合う。もうすでに戦闘をしようと言う構えだった。糺もなのはを地面に寝かせ、刀を取り出す。

「僕は糺。真掛糺だ。君は？」

「……フェイト・テストロッサ」

名乗られたのだから名乗り返さないといけないとでも思ったのだろう。先ほどは断られていた名をすんなりと教えてくれる。武器を向けてくる時点で悪いやつだ、と言う人もいるだろうが、糺は悪い子ではない、とそう感じた。根っからの悪人ならわざわざ名乗り返すわけがないのだ。

その場に再三の静寂が訪れる。その静けさも針でつつけば壊れてしまうようなもの。直後響く地を蹴る足の音でその均衡は崩れる。それは糺の足音だけしかなく、

「フォトンランサー」

フェイトはその場で魔法を撃つ。先ほどなのはを昏倒させた魔法。直撃はヤバい、と直感が知らせる。幸いにもそれは直線にしか進まない。右に一歩ずれて避ける。しかし、これは流石戦い慣れていると言ったものだろう。

「そんなの、お見通し。サイズスラッシュ」

避けた先にはすでにフェイトがデバイスのバルディッシュを構えて切りかかっていた。魔力で威力が上乘せされたその鎌は十分に脅威であり、威力は申し分ない。両手の刀をクロスしてその刃を受け止める。一瞬の静止の後、二人は後ろに飛び退く。どちらの顔にも慢心も油断もない。ただあるのは、勝利への執念とでも言おうか、そういう類の気迫だけだった。

「やるね」

「無駄口は、いらぬ」

『Arc Saber』

バルディッシュの声と共に回転する刃が飛ぶ。いきなりの攻撃にとっさに防ぐが、目の前にはフェイトが迫る。なのにも使った戦法。単純だが、それ故に強い。それも受け止めるが、その勢い、威力は抑えきれなかった。その力が流れるままに木に激突する。この戦い、ここにきてようやく一撃が決まった。それでもその一撃は決定となるような一打ではなく、このまま戦いは続くのだろう。

またしても先に動くのはフェイト。糺は先手に出ることは無く、すべてに対処しているようだ。先ほど同様、フォトンランサーを飛ばしてくる。だが、一度同じ戦法は使えない。それは戦いの鉄則。糺も同じように魔法弾を生成し相殺させる。だが、それこそ罠だったのだろう。気づくべきだった。

「撃ち抜け、轟雷」

『Thunder Smash』

機動力を活かす戦い方をするフェイトにとってこの魔法は足を止める必要があるために多用はしない。だが、多用しないだけで、この魔法は足を止めるだけの価値があるのだ。その太い光線の様な魔法は糺に直撃。土埃が舞う。それでもこの戦いの結果を予想するにはたやすいだろう。フェイトもこれで勝った、そう思った。だが、土埃

が晴れ、見えたのは無傷で立つ糺の姿だった。

「ああ、ホントはちゃんとした魔法使わないつもりだったのに。強いなあ、フェイト」

思い返してほしい。この確かに言葉通り、糺は今までちゃんとした魔法、と言うものは使っていなかった。だがここにきてその自分で決め守っていたルールを破ったのだった。

「……ふざけないで」

「え？」

「ふざけないで!!」

その声と共にフェイトの周りには数十と言う<sup>フォトンスファイア</sup>発射体が出現する。

怒るのも無理はないだろう。それでは今の今まで、必死に戦ってきた自分が馬鹿のようではないか。本気でやらずに、ただ遊んでいただけだと言っのか。

その怒りがその魔法に現れたのだろう。占めて38もの<sup>フォトンスファイア</sup>発射体から数多の、千をも超えるであろうかという弾丸が射出される。そのすべてが糺に向かってくるのだ。

糺の足元には白い魔方陣が展開される

「<sup>ミキリ</sup>見切 <sup>フウリン</sup>風輪」

先ほども凌ぎ切った魔法とは別のもの。乱れ襲う弾丸1発1発をすべて見切る。まるですべての弾丸が糺を避けて通っているかのよう。その魔法のからくりとはいったって単純。すべての弾丸の内、危険なものだけを魔力を纏う刀で風を切る如く打消し、細かな、弾丸は体を回転させて避けるのだ。体に纏う魔力で押されるように、弾丸はその周りを綺麗に避けていく。そして数秒後、全弾打ち切ったフェイトの前にいるのはすべて躲しきった無傷の糺。

「あ」……」

思わずその言葉がフェイトの口から出てしまう。だが、そこで魔力が尽きたのだろう。糸が切れるようにフェイトはその場で倒れてしまった。

「えっと、僕の勝ちかな？」

とりあえず、と糺は封印用の魔法弾をジュエルシードを取り込んでいる猫に当て、それを封印する。そしてその足でフェイトの下へ行き背負う。流石にこの場所に放置と言っわけにもいかないだろう。

「お疲れ様。流石だね、糺」

不意にユーノから声を掛けられる。すっかり忘れていた糺としては少々気まずいものがあった。

「おお、ユーノ。巻き込まれなかったか」

「僕は大丈夫だよ。それよりジュエルシードを」

「……え？」

「……え？」

あまりの図々しさに言葉を失ってしまう。何を血迷ったのであるうか、このイタチ、差も当たり前のように人の功績を奪おうとしたではないか。別段糺としては必要でもない訳だが、ここまであからさまだと逆にやりたくなくなるのが人間と言っ物だろう。

「ん、なんかなのはだとフェイトに取られそうだから僕が預かっておくよ。」「じゃ」

それらしい言い訳をして飛行魔法を使って、その場を離脱する。後  
ろでユーノの声がしたが、糺はそんなものには耳を貸さなかった。

ジュエルシードを入手後、糺はフェイトを連れて近くの公園まで来  
ていた。本当は家にも連れて帰れたらいいんだが、あいにく糺は  
フェイトの家を知らないためそれは出来なかった。

時間はまだあるとは言えど、帰りはここらを通っているバスになる  
ことだろう。

適当にフェイトをベンチに座らせる。変な愛誠になっていないか  
を確認してから糺も座る。ここで変な大勢になっていたら起きたと  
きにあちこち痛くなる虞おそれがあるのだ。ふう、と一息いれる。思えば昼  
からはずっと動きっぱなしだった。そう思うと疲れがどつとでてく  
るようで、ゆっくりと舟をこぎ始める。天気がいい。これなら昼寝を  
しても風邪はひかないだろう。糺が最後に思っていたことはそれ  
だった。

はっ、と意識が覚醒するころには既に日は傾き、空は夕焼けに染  
まっていた。もうフェイトは帰ってしまっただろうかと、隣を見る  
と、そこにはじつとこちらを見つめるフェイトがいた。

「うわっ、まだ居たのか」

「失礼、です。連れてきたのは、そっちのはず。お礼したかった」

明らかにむっとしたフェイトに、そんなの別に良かったのに、と返  
す。

「あ、さっきはごめんな。まさかあんなに怒るとは思わなかった。  
……本気でやらなかったわけじゃないんだよ。まだ戦い慣れてない  
からさ、魔法に頼らないでやってみたかったんだ」

「そうだったんですか？ でもこちらこそすいません。あの魔法……  
怪我しませんでしたか？」

あの魔法、と言うのは発射体フォトンスフィアを馬鹿みたいに出現させたあれだろう。確かに危なかった。魔法を使わなければ怪我はしただろう。

「まあ、魔法で避けたから大丈夫だったよ」

「えっ!? あの魔法、避けたんですか？ ……普通は無理ですよ……」

驚きを隠せないフェイトは、変なものを見るような目で糺を見る。糺は魔法も教えるつもりは無かったので、もう苦笑いをするしかなかった。

「じゃあ、はいこれ。お詫び」

そう言ってポケットから取り出したのはジュエルシード。蒼い宝石のようなそれは、先ほどのような暴走状態にならないように封印してある。それを見たフェイトは驚いたような顔で、驚いたような声を上げる。

「えっ？ いいの？ 君を攻撃してたのに？」

「いいよ。どうせ僕は使わないし、てか使い方知らないし。それに君は悪い子じゃないみたいだからね」

その宝石をフェイトに握らせる。驚きはしたものの、フェイトは蚊の鳴くような小さな声で。聞き逃しそうなほど小さな声だったが、糺にはしっかりとその言葉は届いた。

「ありがとうございます」

「うん、じゃあ帰ろうか」

公園にある時計を見ると、ちょうどそろそろバスの来る時間だった。立ち上がったって、バス停の方へ行く糺だったが、後ろにいるフェイトは一向に動こうとしない。どうしたんだ、と聞いてみる糺。しどろもどろになりながらも、フェイトはそれにも答えた。

「えっと、ここに来るときは飛行魔法で来たんですが、魔力が尽きてしまいました、もうできないんですよ。あの、それで、お金も持っていないので、ここに泊まるうかと……」

糺は財布をポケットから取り出して中身を見る。今日はそこまで、というか全くお金を使うつもりは無かったので多くのお金は入れてきていなかった。しかし、これなら二人分のバス代ぐらいなら出せるだろう。

「分かった。僕がおごってあげる。こんなところに可愛い女の子置いて行っちゃったら何かと危ないからね」

「えっ!? 可愛いって、そんなわけないよ」

「アハハ、僕は河合って思うから。っと、バス遅れるから早く行くか」

そう言っただけでいまだに座るフェイトの手を握って連れて行った。

夕焼けは既に薄暗く、空の半分ほどはもう夜空だった。昼と夜の移り変わり。世界がひっくり返るそんな瞬間。以前見たそんな空が綺麗で、糺はこの空が好きだった。来るときはあれほど走ってきた道をバスはその何倍ものスピードで走っていく。それにそって景色は様々に移り変わる。

そんなことを考える糺だったが、これは一種の現実逃避でしかない。後ろから凄い視線を感じる。そして頭の中には声が響く。念話

と言う奴だろうか。糺には使ったことは無いので分からないが、うつとおしいまでにその声は響く。

「糺、ジュエルシードはどうしたんだい？」

それは紛れもなく、先ほど糺がおいて行ったユーノの声だった。ちなみに視線と言うのはなのはだろう。フェイトと一緒にいる糺を問い詰めたい、と言ったことだろうか。

失念していた。糺は嘆く。帰りが一緒になることは少し考えれば分かっただろう。なのはジュエルシードへの対応から考えて糺と同じ町に住むことはほぼ確実なのだ。さらにこのバスと言うのはそれほど多くない。30分に1本、下手をしたら1時間に1本と言うレベルなのだ。それだけで被る可能性は十分高いだろう。それに加え、なのははフェイトと同じように気絶していたのだ。誤差はあれど、フェイトと同じくらい眠っていたと考えるべきだ。そうなればおのずとこの時間に鉢合わせると言う可能性は格段に上がる。

はあ、とつい溜め息がこぼれる。

「ジュエルシードはもう持ってないよ。この子に渡した」

「な、何を考えているんだい、君は!？」

その声と共になのはの肩にいるイタチからキュッと言う鳴き声が聞こえる。それほど驚いたようだ。だが、糺は思う。そのどこに不思議がる事があるだろうか、と。

「確かに、この子はなのはを攻撃したかもしれない。でもな、僕はお前、ユーノよりもこの子の方が信じられるんだ」

「なっ!？」

ユーノが何か反論があるような声を上げるが、だってそうだろう、と糺は続ける。



「そんな動物の皮被って正体を教えてくれない奴よりは、真つ向から戦った奴の方が信じるに値する。確かお前言ったよな？ 自分たちがジュエルシードを発掘したって。ならお前はそんな小動物なんかじゃなく、もっと大きな生き物なんじゃないか？ そんな正体を隠している人を信じられるほど僕は安い人生送ってないんだよ」

「でも、それは……」

「でも、じゃないよ。これは今現在の状況確認だ。理由があるかもしれないが実際問題、事実だろ？」

「……はい。そうです……」

「まあ、心配するな。この子が悪いことをするようなら僕が止めるし。それに断言する。この子は悪い子じゃない。あんな近接でやりあったんだ。きっとなのは同じようなこと考えてるんじゃないかな？」

その言葉でこの会話を打ち切る。だが、問題と言うものは次から次へと入ってくるものだ。後ろでじっと見ていた視線が外れたかと思うと、何やら話し声が聞こえる。そしてあることか、糺の反対の席になのはがやってきたのだ。

「糺君っ、ユーノ君に聞いたよ！ ジュエルシードどうしたの？」

またそれが、と糺はついげんなりして答える。

「ユーノに話したからそいつに聞いてくれ……」

その答えで納得したのか、それでも違う問いを投げかける。とは言うが、違う問いと言うのもあらかた予想がつくもので、なのはが気にかけていることなのだろう。

「じゃあ、その子は誰なの？ 糺君のお友達？」

その問いに、絶対にしゃべらないと思っていたフェイトが口を開いた。

「君には関係ない」

それでもそれだけを言ってフェイトは再び口を閉じる。ジュエルシールドをめぐる敵だからだろうか。糺とは違い、全くしゃべろうとはしなかった。糺もそんな彼女のことを勝手に教えるわけにもいかずに、

「まあ、僕の口から言っつわけにもいかないし」

のらりくらりとなのはの問いをかわす。

「じゃあ、糺君は？ ジュエルシールド持って行ったって言ったけど、糺君も集めるの？」

まさかの糺自身に対する問いである。流石にそれにも答えない訳にはいかない。そもそも言い訳の材料がないのだ。

「えっと、僕は集めてるわけじゃないよ。なのはにも、この子にも味方してるわけじゃなくて、中立、っていうのかな？ そんな感じだよ」

それは嘘でもなんでもない、紛れもない真実である。別にユーノのため集めようとは思わないし、フェイトが集めてるから手伝おうとも思わない。しいて理由を上げれば、面白から。最低だ、と言われるかもしれない。だが、糺は思うのだ。こんな身近でこんな不思議で面白い出来事が起きているのに、首を突っ込まないなんてもったいない。こんな仕方のない理由だが、それでも、立派な理由。

「へえ、そうなんだ」

その答えに満足したのか、なのははそれから普通の、年相応の会話を始める。糺もそれならと会話をするが、やはりフェイトは黙ったままだった。

それから数分。糺たちの降りるバス停についた。なのははもう一つ先らしいので、ここでは糺とフェイトだけが降りる。言った通り、フェイトの分のお金も払ってバスから降りる。

「さて、君の家ってどこにあるの？ 送っていくよ？」

「え？ そこまでは良いよ。もう遅いし自分で帰れる」

確かにすでに6時は越えてしまっている。この時間を遅いと言うのかどうかは人それぞれだとしても、八神家の夕食は7時だ。まだ怒られはしないだろう。だけど、確かにお金までもらっているのに、ここから送ってもらうなんて迷惑になりそうで糺にはできない。

「ん。分かった。……じゃあ、一つ質問。なんで君はなのはと話そうとしないんだ？ 話せば分かってもらえるかもしれないのに」

「……君には分からないよ。あの子と分かり合えるはずがない。君にはわからないよ」

「まあ、僕にはわからないよ。だから分かるうと話を聞いてるんだよ、なのはも、きつと」

「っ……………じゃあ私は帰るから。……君がもし敵にまわっても私はまた戦うから。今日のようにはいかない」

「ああ、それは安心して。今日はたまたま。面白そうだったから割って入ってみただけ。なのはがあそこでフェイトに勝ってたらなのはと戦ったし」

そう言うとフェイトは啞然とした様子で目を見開く。それでも理解できないと言った複雑な表情をしている。無理もない。勝った方

と戦う、なんてどんな戦闘狂だ、と思うだろう。でも最後には

「クスッ、君は不思議だね」

ここにきてフェイトは初めて笑顔を見せた。いつも無表情のよう  
なだけあって、その笑顔はとても輝いて見える。

「うん、フェイト可愛いんだから、そういつぶうにいつも笑ってたらいいのよ」

どこのたらしの台詞だ、と糺は思うが、そう思うのだから仕方がないだろう。そんなセリフにもフェイトは耐性と言うものがないのか、顔を赤くする。隠すように下を向くが、見意味まで赤くなっているのだから隠しようがないだろう。それを見ていと言ってしまった糺までが恥ずかしくなり、その場の空気が悪くなった。

「あ、あー、じゃあ僕は帰るよ。じゃあな、フェイト」

「うん、君も、今日はありがとう」

いまだに下を向いたままのフェイトだがその声ははっきりと聞こえる。こんなふうになのはとも反してくれたらと思う。きっといい友達になることだろう。すでに星が瞬く空を見ながら糺は帰路へ着く。